

大坂落城に遭遇した二人の女房於菊とおきく

田 端 泰 子

はじめに

大坂落城に遭遇した二人の女房於菊とおきく

大坂城中には、元和元年（一六二五）の夏の陣まで多くの女房が出仕し、男性家臣と共にさまざまな役割をこなしていた。特に冬、夏の陣前後からは徳川方との交渉の場にも大蔵卿局などが重要な使命を帯びて参加することになる。このような有名な女房以外にも、さまざまな階層出身の多くの女房がそれぞれのつとめに励んでいたのだが、女性自身が残した史料の少なさから、大坂城中の女房の実態はほとんどわかっていない。そうした史料の少なさを嘆くなかで、落城時無事に京都に逃げおおせた「おきく」という女房と、淀殿、秀頼らと共に自害した「於菊」がいたこと、城外への脱出に成功したおきくは、のちに孫に女房勤めの実態や脱出時の様子を物語り、それを聞いた孫やまわりの人々の手で『おきく物語』が成り、出版されることになったため、現代のわれわれは貴重な大坂落城時の様相を知ることができる。

この二人のおきくに関する史料を探し、大坂夏の陣前後の大坂城の様相や、そこで仕事に励んでいた女房の姿、特に落城時、彼女らを支えた人々、またなぜおきくが京都へ逃れたのかについて考えてみる。

一 大上臈になった於菊^{おきく}

大坂城落城時、淀殿らと共に自害した於菊は伊勢氏の出身である。『別本伊勢系図』¹によると父は伊勢貞景、母は松永久秀の娘であったという。父貞景は室町時代に政所執事を勤め、戦国期には故実家として知られていた伊勢氏の流れであり、貞景自身も政所執事を勤めた。しかし貞景の父貞良が戦死したため、少年時代は家臣に養育されるという厳しい状況のもとで育つたとされる。成長後、織田信長、豊臣秀吉に仕えたが、病気がちであったためか勤めを辞し、慶長十四年（一六〇九）五十一歳で亡くなったという。母は松永久秀の「物領娘」であったとあるので、久秀の長女だったことがわかる。久秀も信長に

従ったが、天正五年（一五七七）信長に背き、信貴山城を攻められ、自殺している。於菊の父母の婚姻は、信長の御台所濃姫（貞良の妻は濃姫の妹である）の希望によりなされたところなので、松永久秀が信長に降伏していた永禄十一年（一五六八）から天正五年までの約十年の間になされたことになる。

戦国期に限定した伊勢氏略系図を左に記す。



(△……男子6人)

父母の婚姻の年から逆算すると、父貞景は永禄十一年には十歳で天正五年には十九歳であるので、この年代での父の婚姻は、あとになるほど妥当であるといえる。

於菊が松永弾正久秀の孫娘であったこと、父は室町期以来政所執事を務め、戦国期には故実家としても著名な伊勢氏であったという家柄は、於菊が豊臣家の女房となるには、十分な条件であったといえよう。また父貞景は信長に仕えたが病身のため致仕し、のち秀吉に仕えて五十一歳で亡くなったとあり、貞興は明智光秀に仕え本能寺の変で討死したという。

於菊は十二歳の時に出嫁し、すぐに女房の最高級の職階「上臈」となる。没年（元和元年）から逆算すると、於菊は天正八年（一五八〇）生まれとなる。これは父貞景の婚姻年齢とも符合し、出生が父の婚姻後と

考えられるので辻褄があう。十二歳での出仕の年は天正十九年（一九一）であるという。豊臣政権の絶頂期にあたる。そして翌年十三歳のとき、秀頼の参内に供奉し、以後大内裏に三ヶ月奉公し、「宰相」の女房名をもらったとされる。しかし秀頼の生年は文禄二年（一五九三）であるから、天正二十年（文禄元年）には秀頼は生まれていないので、参内に供奉したのであれば、文禄二年以後でなければならない。豊臣家の女房になってしばらく後、禁裏で女房勤めを体験したという経歴は、妥当であると考ええる。最終的に於菊が「大上臈」という豊臣家に仕える女房衆の最高位に上るためにも、内裏での研修は役立ったであろう。

その後於菊は秀頼のもとに返され、「弁宰相阿古大上臈」と呼ばれる。その後淀殿が「是非」と所望したため、淀殿に奉公替えし、慶長二十年（一六一五）五月八日、「数千人」の中から選ばれた「女中」（女房のこと、諸家系図は江戸時代に編纂されたため、江戸時代の女房の呼び名である女中が使われたのであろう）七人のうちの一人として、三十六歳の生涯を閉じたという。

『別本伊勢系図』が語る於菊の略歴に関する考察は、右の通りである。室町幕府時代、政所執事を勤めた伊勢氏の子孫伊勢貞景には妹がいて、その女性には信長家臣「池田庄九郎」（おそらく紀伊守勝九郎元助の誤りであろう）の妻となっており、貞景の次女長女が於菊は於鶴^{おつる}といつて、比丘尼御所順花院⁽²⁾の弟子となり、寺を継いだという。室町期よりは威勢が減退していた伊勢氏の起死回生の策として、伊勢氏一族の女性たちが婚姻や女房づとめ、また尼となって努力している姿が浮き彫

りになる。

いっぽう『別本伊勢系図』に記載されている伊勢氏の男女を見ると、伊勢氏は戦国大名や国人領主、信長・秀吉時代の武将と婚姻関係や主従関係を結んでいることがわかる。貞親の子貞宗の姉妹は今川義元の妻であり、その娘は武田盛信の妻、貞宗の子貞忠の姉妹は細川尹賢の妻、貞良の姉妹は近江の国人領主多羅尾氏と永原氏の妻になっている。貞景の妻が松永弾正の娘であったこと、母は濃姫の妹であったことはすでに述べた。貞景の姉妹が池田勝九郎元助の妻になっていたことも前述した。また貞良の子息貞興は明智光秀の婿として、山崎合戦で討死したという。秀頼が名付け親となった貞衡は大坂落城後浪人となった後徳川家光に召し出されたという。

このように伊勢氏一族の男女が、戦国大名や織田、豊臣、徳川、明智家と婚姻関係を結んでいた、家臣となって仕えた理由は、それまでの伊勢氏の幕臣としての人脈や家職としての武家故実の知識が、戦国期・織豊政権期の領主層にとつては、他家からは得られない独特の財産として重宝されたためであろう。於菊はこうした伊勢氏一族を背負っていたため、淀殿・秀頼時代の女房として出世したと考える。

大坂夏の陣の際、於菊は大上臈であったことがわかる。女房の階層の最上位である。足利義政時代の室町幕府では、大上臈、小上臈、中臈、下臈の四階層があった。⁽³⁾ 秀吉は関白になり、内裏や室町幕府の職制を継承している部分も多いので、これは秀吉、秀頼時代の女房の職階として継承されたと考える。つまり於菊は十二歳で女房となつて以来、大内裏での研修期間を含めて、研鑽を積み、夏の陣以前には、豊

臣家の女房の最上位にまで昇進していたことになる。

では、大坂夏の陣の最後の部分を記す徳川方の史料『駿府記』⁽⁴⁾は、落城当日の様子をどのように記しているのであろうか。視点を徳川方において検討しよう。

五月七日、寅の刻、將軍家(徳川秀忠)は「大坂表」に出発した。大御所家康は卯の刻平野天神森に「動座」する。巳の刻、茶臼山辺で合戦が始まり、大坂勢は敗北し、真田左衛門佐(幸村)。昌幸の次男。関ヶ原合戦後、九度山に蟄居していたが慶長十九年大坂城に入り、冬、夏の陣で活躍)、明石掃部助(全登。てんしやうもと宇喜多秀家家臣。関ヶ原合戦で没落し、浪々の後大坂城に入る)、長曾我部宮内少輔(盛親)ら大坂方の武将たちは奮戦したが、遂に敗戦の将となる。また大野修理(治長)宅が放火され、その火は二之丸に移り、本丸まで残らず焼亡する。そのため「敵」(大坂方の武士)「二万余」があるいは討たれあるいは捕らえられた。この日千姫は大坂城を出て、岡山に到着している。秀頼と淀殿、「其外女中数輩」「大野修理母子」「速水甲斐守」(守久)その他の者は「山里帯くるわ(曲輪)二間五間之庫」に閉じ籠っていた。

翌五月八日、午の刻、將軍家(徳川秀忠)は井伊直孝を召して、秀頼母子そのほか「帯くるわ(曲輪)」に籠るところの「族」は「切腹あるべき由」仰せられた。

このときの「自害之衆」(秀頼と同時同所帯曲輪で自害したもの)を左に記す。

秀頼公(年二十三) 御母儀(号淀殿) 大野修理大夫 同信濃守 速水甲斐守(守久) 同息でき(年十三) 津田左近(年二十六) 竹田榮

翁 堀対馬守 武田佐吉 高橋半三郎(年十五) 高橋十三郎(年十
三) 埴原八藏 埴原三十郎 寺尾少右衛門 小室茂兵衛 土肥
庄五郎 加藤弥太郎 森島長意 片岡十右衛門 以上二十人
女中衆…わごの御方(伊勢国司親類) 大藏卿(大野修理母) 相庭
局 右京大夫(秀頼御乳母) 宮内卿(木村長門守母、秀頼
御乳母) お玉(湯川孫左衛門姉) 二位局(渡辺越後守母、
人呼出助命給) 以上六人

新座衆…毛利豊前守 同勘解由(豊前弟) 氏家内膳入道道喜
中方将監(浅井周防子) 同半兵衛 真田大助(年十三、

左衛門子) 以上六人

男女一所自害三十二人

冒頭の二十人は、秀頼、淀殿と共に大坂方の政治の中心にいた大野
治長や速水守久、竹田榮翁など、このころの豊臣家の政治に携わって
いた秀頼の臣下であり、また秀頼の小姓たちであると考ええる。真田幸
村ら武将たちは曲輪の外の所々で戦っていたので、自害の人数には
入っていない。

次に記されている六人の女房衆の名は注目に値する。最初に記され
た「わごの御方」こそ、伊勢氏に出自を持つ「於菊」こと「阿古大上
臈」であつたと考える。それは「わごの御方」の注記として「伊勢国
司親類」の文言があるからである。『駿府記』の作者たち徳川方の
人々は、おそらく「あこ」を「わご」と聞き誤つたのであろう。

大藏卿は大野治長の母で、淀殿の乳母であり、冬の陣以来駿河や江
戸に赴き、大坂方として徳川方と折衝にあたつた人である。右京大夫、

宮内卿局は共に秀頼の乳母である。このほか二位局の名が見えるが、
この人は秀吉の馬廻であつたが関ヶ原以後徳川秀忠に従つていた渡辺
筑後守勝の妹であり、『駿府記』は「母」とするが、実は妹)、これ以前に
常高院(お初)と共に二位局が家康の使いとなつたこともある人であつ
たので、当時千姫付きの家臣となつていた兄渡辺勝などより助命の働
きがなされ、「助命」の命が下つていたため、曲輪外に呼び出され生
き延びたのであろう。また「孝藏主」の名が見られないのは、冬の陣
以前に北政所の元を離れ、徳川家康の女房として大坂を離れていたた
めである。

「新座衆」としてあげられている毛利豊前守は毛利吉政で、関ヶ原
で西軍であつたため、父とともに土佐に流され、慶長十九年土佐から
脱出し、大坂城に入つた人である。夏の陣で奮戦したが、敗軍の将と
して自害したものであろう。氏家内膳入道道喜は行広が本名である。

秀吉の家臣として大垣城主や桑名城主などを勤め、関ヶ原で西軍に参
加したため、のち流浪、夏の陣以前に大坂城に入り、家康の招きに応
じず、秀頼と共に自害した人である。こうしたもと秀吉家臣であつた
が関ヶ原合戦後浪人となり、冬、夏の陣で再び豊臣家に仕えた人や、
真田幸村の子大助、それに浅井長政の子息井頼の子である中方氏ら、
淀殿の生家浅井家の子孫が、新たに、「新座衆」と周囲から認識され
るかたちで、冬、夏の陣に際して、淀殿、秀頼の周りに再び参集して
いたことが判明する。真田大助は前日五月七日の決戦で父幸村と共に
活躍したことが『大坂夏の陣図屏風』で明らかである。この屏風には
真田父子、毛利勝永、大野治長・治房兄弟が描かれているので、決戦

の翌日大助は秀頼と共に自害したことになる。

男女の性別を超えて、乳母としての勤めにおける信頼関係や、かつての主君秀吉の恩義を忘れず、またこうした機会を捉えて家の再興や発展を願って、大坂方に加わった人々の熱い思いが、「自害の衆」の名前を検討することによって見えてくるように思う。

於菊は自害した女房衆の中で筆頭に記されている。乳母などを含めた上臈、中臈、下臈という女房集団のトップとして、他の女房衆の命を助けるためにも、豊臣方として勤めあげた女房全体の責任を背負って、女房衆を統括する立場にあった淀殿と共に、自害したのであろう。於菊はこの年三十六歳であった。

二 落城時を振り返る山口氏の娘おきく

大坂方の敗戦、落城を経験したが、運良く命を助かったのが、もう一人の女房おきくである。

『おきく物語』⁽⁵⁾によると、おきくは浅井長政に仕え最終的に「千二百石」をもらっていたという山口茂介の孫で、山口茂左衛門の娘である。父茂左衛門は浅井家が亡んだあと、藤堂高虎の「浪人客分」として三百石をもらっていたという。同じく近江出身の豊臣大名藤堂高虎を頼ったが、藤堂家の旧臣とは区別され、「浪人客分」の処遇に甘んじなければならなかったであろう。大坂陣のとき父は高虎配下をはなれ、つまり大坂方として城中に入ったので、豊臣家から「御具足」を拝領したが、指物がなかったため、娘きくが紅白の布を縫い合わせ

て指物にして渡したのが、餞別の品となったという。父は大坂の陣で「うち死」している。

娘おきくは没年から逆算すると慶長元年（一五九六）生まれである。大坂城落城時は二〇歳であった。おきくは、淀殿がかつて祖父が仕えていた浅井長政の娘である点から、その縁で淀殿に「御奉公申候」と述べる。しかし慶長元年生まれのおきくであるから、少なくとも十歳以上になつていなければ、女房づとめには適さない。故に慶長十年ごろ以後、つまり淀殿が秀吉の後家の一人として、大坂城中で秀頼の後見役割に集中しつつあったころ以後の女房づとめであったと考える。

おきくの淀殿の女房としての体験談は、戦乱時ばかりでなく、平常時の体験にも及んでいるので、まずこの部分からみてみよう。

印象に残っているのが、「千姫」の「鬢そぎ」を見たことである。

千姫は「碁盤のうへに、御たち被成候を、秀より公たかうながたにて、御かみを、すこし御きりそめ、なされけるとなり」と述べる。千姫はまだ背が低い少女期であったので、秀頼から鬢そぎをしてもらうとき、千姫は碁盤の上に立ち、その髪の手先を秀頼が笄で少し切ったという。ほほえましい光景である。

一般には鬢そぎは少女が十六歳の時に鬢の手先を少し切る儀式とされている。しかし千姫の場合慶長八年（一六〇三）七歳のときに秀頼に嫁しており、十六歳になるのは一六二二年（慶長十七）である。冬の陣の二年前である。あどけない少女の姿で描写されている千姫とはそぐわない気がする。したがって鬢そぎは、おきくの奉公開始時期とも考え合わせて、慶長八年の婚姻からあまり年月が経っていない慶長十、十

一年ごろのことではなかったかと推測する。

平常時の大坂城の女房の役割としておきくが記しているもう一つの部分は、城中でのお膳の出し方である。「御膳をば、おすゑより出すを、御手ながのものうけとり、そのとき、御すゑのもの、どく味をいたし、また御そば衆へわたす、ときぐ、御手ながのもの、毒味をして、出しけるなり」と語っているところから、秀頼や淀殿に出すお膳を整えたのは「お末」つまり「お半下衆」(給仕係)の目の前で「お末」(下臈)であり、それを受け取った「御手長」(給仕係)の目の前で「お末」が毒味をし、大丈夫であれば「御そば衆」と呼ばれた男性の近習に渡すというのが通常のお膳の出し方であったことがわかる。また時には「御手長」が毒味役となることもあったという。

女房の仕事は様々であり、大坂城の上臈は、日常は主君への取り次ぎを職務とし、時に主君の代わりに寺社へ参詣したり、朝廷や公家、大名家への使者となつて、主君の手足として重要な役割を主君の代わりに勤めていた。これに対して主君の日常生活を支えていたのは主に中臈であり、衣装の準備、食事を整えること、また上臈の外出のお供や宴席の設定などを職務としていたと考えられる。もちろんこのような日常の職務も、上臈の指示のもとになされただろうことはいうまでもない。下臈は上臈、中臈から命じられた雑多な仕事を実際に行う女性たちである。

おきくが食事の出し方を詳しく物語っている点から、父山口氏の高虎家臣時代の石高から推測しても、おきくは中臈クラスの女房であつたと考える⁽⁶⁾。

おきくが最も力を入れて語ったのは、大坂落城直前から落城直後の混乱期に、自身がどんなことに遭遇したかである。現代のノンフィクションのジャンルに属する、貴重な語りをおきくは残した。

冬の陣以来、「いくさ評定」が「御内所」で何度も開かれ、局の前には非常食としての餅が毎日置かれたことで、城中の女房たちは、籠城戦の近いのを知った。また鉄砲玉が飛んできて「女中」(女房が打ち抜かれたという事件もあった。そのためおきくは京都から大坂城に來た東福寺の僧に、「挟箱」^(はさみばこ)に着物や器を入れて預け、「もし、そのうち、落城も候はば、なきあとも、とふらい、下さるべく候へ」と頼んでいる。もしも自分が命を落としたときは、挟箱に入れて預けた財物で供養してほしいという意味であろう。

元和元年五月七日、おきくは落城など思いも寄らず、「下女」(下臈)にそば焼きをつくれといいつけたりしている。その後玉造口その他が焼けたと騒がしくなったので、「千畳敷」の縁側へ出ると、所々「やきたて」⁽⁸⁾でいたので、局へ帰り、帷子を三枚着て、下帯も三つして、秀頼から拝領した鏡を懷中に、台所へ出る。そこには竹田榮翁が黒い具足を着て詰めていた。台所にいる他の女房に、見知らぬ侍が、「肩口のきずをみて給はれ」「上おびをもしめて給はれ」と呼びかけていたが、その女房は構わず、急ぎその場を離れていった。竹田榮翁は「女中がた、いでられ申さず候やうに」と城外に逃亡しないようにと叫んでいたが、その声にも構わず、台所を後にする。

知らない侍から、傷の具合を見てほしい、上帯が締められないので(おそらく傷を負ったためであろう)締めてほしいと呼びかけられている

点から、籠城戦中の城中の女性の役割が浮かび上がる。傷の手当や衣類、具足の補修や着替えの手伝いは、城中にいる女性の役割であったのだろう。またこれらの侍は「御台どころの外にて」叫んでいることから、台所には女房たちがいることを普段から認識していたこと、そこへ行けば、食料ももらえるかも知れないこと、つまり台所が女性の職場であり、籠城戦中も城内の食料配布を担当していたことが推測される。この侍たちは、遠慮がちに台所の外から呼びかけている点にも涙を誘われる。

ここに登場する竹田榮翁は、前述のように翌八日午の刻、淀殿らと共に自害して果てている。このおきくの語りは、榮翁の死の前日の姿であることがわかる。彼は秀吉時代に活躍した医師竹田定加の子息で、秀吉の「御はなし衆」であつたため秀頼に付けられた家臣であり、慶長十九年十月大坂城に入城し、毛利氏らと力を合わせて、徳川方と戦つた武将である。千人の大将であつたともいわれる⁽⁹⁾。

近くに「金の瓢箪の御馬じるし」が転がつていたのを、側にいた「御手長」の「おあちや」らが、「すて置ては御恥辱をあらはす」と壊して捨てた。「御手長」は給仕係で下臈にあたるが、その下臈に至るまで、籠城戦の最終段階ではあつたが、大坂方として恥ずかしい振る舞いはできないと、女房たちの意思は堅固であつたことがわかる。

このあとようやく城外に出たおきくが目にしたのは、防御柵としてこしらえられた竹束である。その陰から、単衣もの一枚を着た武士が「さびがたな」をぬいてやってきて、「金にてもあらば出せよ」というので、懷中に持っていた「竹ながし」(竿金)二本のうちの一本を与

える。その者に、おきくが「藤堂殿御陣はいづかたぞ」と問うと、「まつ原口」(松原口)と答えたので、そこへ連れて行ってもらう途中、「要光院殿」(常高院の誤り。お初。淀殿の妹で、京極若狭守の母)が女房や侍らと共に、足を押さえて城から逃げてこられたのを見付け、そこへ「かけより」それ以後「御供」し、森口(現守口市)の在家(民家)に入ることができた。

城外への脱出にむけてかねてよりおきくがおそらく拝領したのであろう竹流し金が、自分の身を守り、父親がかつて奉公していた藤堂高虎軍の所在を聞き出すのにも役立ったことがわかる。この竹流し金については城中の浪人衆に対し、馬上一騎に付き竹流し二つずつ下されたとあるので、おきくが懷に入れていた竹流し金も、それまでの女房つとめに対する拝領金であつたと思われる。しかし藤堂高虎は夏の陣で井伊直孝と並び家康軍の先鋒を務めた一方の大将で、五月六日、七日には大功を挙げ、その功によって、五月二十八日には井伊氏共々「金銀之千枚吹、分銅二」ずつをもらうような働きをした武将である⁽¹⁰⁾。高虎の元を目指していたら、おきくは戦闘に巻き込まれていただろう。途中で常高院に出会つたのは幸いだったと思う。

森口の「在家」では、常高院の御座所として、菰蓆を敷きその上に古畳二畳を敷いてその上に常高院に座ってもらつたという。他の女房や侍は蓆の上にいたとも述べる。その時どこからか行器⁽¹¹⁾に「強飯」(赤飯)が入つたのが届けられたので、皆は紙にこれを載せて食べている。この食事は常高院の子息である京極若狭守忠高から届けられたものであろうと思われるという。

常高院のお供の女房の中に、山城宮内の娘がいて、この人は帷子一枚、下帯も一つであったので、「それにては難義^(義)なるべし」と思い、おきくは自分の帷子一枚、下帯一つを与える。この点にも注目しておきたい。それは、おきくが三枚の帷子を着て、下帯も三つ身に付けていたのは、着物を置いてくるのが惜しかったからだけではなく、戦闘で刀が振り下ろされたり、鉄砲玉が飛んでくる最中に逃げようというのだから、三枚の帷子は単衣であつても三枚重ねて着ていれば、身を守る道具となるだろうからである。そのことを考慮して、帷子一枚だつた知人の女房に、おきくは一組の衣類を進呈したのである。機転が利くと共に同僚思いであつたおきくの姿が浮かびあがる。

常高院は家康の召しにより、乗り物で出立されることになり、そのとき女房たちに向かつて「若^も將軍様仰ありて、いづれも、女の事なれども、城中にをり申たるもの、いかやうに、仰つけらるべきも、しれず候へば、随分よろしく申べく候へども、兎角御下知は、そむかれず、覚悟し給へ」といつている。この言葉にも注目したい。大坂城中にいた者は、女性であつても、敗戦した以上、どのような処罰があつてもおかしくないと断言している点である。女房たちにとっては、これまで豊臣家の女房として勤めてきたからには、その勤めに対して責任をとり、処罰が下される恐れは多分にあつたことがわかる。つまり女房たちも男性家臣と同じく、主従関係が形成され継続されてきた、豊臣家の家臣だつたといえる。常高院のこの言葉を聞き、「みななきかなしむことおびただし」とおきくが語っている点にも、大坂方の女房として、女房衆が処罰を覚悟したことがわかる。

かつて本能寺の変で織田信長が最期を迎えたとき、「女はくるしからず、急ぎ罷り出でよ」と、どこへでも逃れるように、と女房たちを「追ひ出させられ」た時代から、また事態は進んでいた。女房たちにも罪が問われる時代へと事態は進んでいたのである。前述の於菊や大藏卿局など六名は、女房衆の代表として、管轄者、上司として、他の女房たちを救うためにも自害したことが明らかになる。

常高院はそれまでの和平の使者、徳川方との交渉役のつとめを再び果たそうとして、取りなすと言つたのだろう。おきくは記していないが、このあたりで五月八日になつていたのであろう。やがて常高院が帰つてきて輿から出られる前に事態は終息し、「何れもみな、のぞみ次第、いづかたへも、おくりつかはすべきよし、上意」とのお達しがあつたので、女房たちはたいそう喜んだという。一転して一般の女房たちの処罰はないことが決定された。この決定が出た背景は、徳川方が上臈六名の自害を評価し、それ以上の犠牲は必要とみた点にあつたであらう。しかし実際には徳川方から送ってくれるような配慮はなかつたことは、次のおきくの体験から知られる。

大坂城をなんとか無事に脱出し、森口でどこへでも落ち延びてよいと許可をもらつたおきくは、「松丸殿」(かつて秀吉の側室であつた京極龍子)に仕えようと心に決め、京都へ上ることになる。同僚の宮内の娘も「一所(一緒)に」と頼まれたので同行する。途中大坂城中で見知つていた町人を頼るが、「大さかの落人」故、一夜も泊めてもらえず、晒布一疋づつをもらい、織田左門の屋敷に参る。ここでもなかなか門内にも入れてもらえなかつたが、宮内の娘は織田左門の姪であつ

たので、おきくは「是は御姪子にて候敷、それにても、御入なきや」といったところ、早々に屋敷に入れてくれた。左門は「めひをひとりひろひたり」と殊の外歓待してくれたので四、五日逗留し、その二階に二人で隠れていたという。織田左門は信長の弟長益(有楽斎)の子である。有楽斎は関ヶ原合戦後家康に仕えたが、淀殿の叔父にあたることから、秀頼を補佐する役割も果たし、豊臣方、徳川方に両属していた人である。夏の陣直前に大坂を退去し、家康から江戸に屋敷をもらった人物でもあるので、おきくたちが頼るには最適の人物だったといえる。長益の子息左門は、秀頼と「御一門」であるので、「人数雑兵共に一万ほど」を与えられて、大坂方の武将として働くことを期待されていたのであろう。大坂入城前は京都の五条辺に住んでいたという。左門は屋敷を立ち去るおきくたちに、帷子一枚と銀子五枚を与えている。

城外に脱出しても、世間の目は女房であっても「落人」と見る点に変りはなかったことが示されている。敗者の側への眼差しは、いつの時代も厳しかった。その中で、彼女らに手を差し伸べてくれたのは、敵方になってはいたが親類縁者であったことを覚えておきたい。

その後おきくは京都にいた松ノ丸殿に仕える。松ノ丸殿は天正十年に夫武田元明の死後秀吉の側室になった人で、関ヶ原合戦時大津にいたが、その後は京都に戻っていた。晩年を「誓願寺」で送ったとされるので、おきくが京都へのぼり、松ノ丸殿を頼ろうと思ったのは理にかなっている。

のちおきくは京都で外科の医師をしていた田中意徳の祖父と婚姻し、

夫と共に備前にやつてくる。夫が藩主池田家の侍医になったからである。おきくはそのあと長生きし、延宝六年(一六七八)八十三歳の年、備前でなくなったという。

おわりに

大坂城落城という歴史の渦に巻き込まれた二人のおきくに関する史料は、現代の我々に多くの示唆を与え、また落城時の人々の行動や思い、信念、判断などを示してくれる。

伊勢氏に出自を持つ於菊は、大坂城中の女房衆のトップの一人として、敗戦の責任を取り、秀頼、淀殿らと自害することで、他の多くの女房の命を救うという大きな役割を果たした。

淀殿付きの中臈クラス的女房おきくは、五月七日以前から落城を覚悟して、挟箱に納めた衣類と器を東福寺に預けており、周囲で鉄砲玉に打ち抜かれた女房があつたり、戦評定が開かれているのを見聞きして、七日のうちに脱出を試みているのは、まさに間一髪のところでの正しい判断だったといえる。おきくの脱出から京都への到着までの間の行動は、まさに機転を働かせての危機の乗り切りであり、幸運も重なって無事に仕官先を松ノ丸殿と決めることができたのであつた。

おきくの体験談から考察できる点は豊富である。まず、籠城戦では、城中の女性たちは、食料を配布し、衣類や武具を補修したり、着付けを手伝ったりしたであろうこと、負傷者の手当もしたであろうことがわかる。この点は関ヶ原合戦時の体験を後に語った『おあん物語』⁽¹⁵⁾に

も見られ、そのほかおあんは鉄砲の玉を女性たちが鑄たこと、味方の取ってきた首に「お齒黒」を塗って、高い身分の侍の首であるかのように見せたことなどを述べている。夏の陣では「お齒黒」を塗る余裕はなかっただろうが、そのほかの点は合致するところが多い。

城外への脱出はたやすくはなく、懷中に忍ばせて出た拝領の竿金が、藤堂高虎の陣所を聞き出すこと、案内させることに役立った。帷子三枚帯三つも、身体を保護するのに役立ったと思う。

城中で女房づとめを続けてきたおきくは、豊臣家の家臣である。この点で男性家臣と異なる点はない。従って豊臣方の敗戦は、女房たちへも処罰が下されるのは必然という覚悟を生んだ。しかし女房衆は実戦部隊でなく後方部隊であったことと、女房衆のトップの六名が自害したことで、からくも命が助かったのであった。

しかし、世間の目は「のぞみ次第、いづかたへも、おくりつかはす」という家康の上意とは無関係で、厳しいものであり、「落人」として、知り合いの人の家には泊めてもらえず、織田左門邸でも、門は閉じられたままであった。その門を開かせたのは、おきくの同僚である宮内の娘が織田左門の姪であったという親族関係が存在した点にある。敵、味方に分かれていても親族、姻族、またかつての主従関係は固い絆として作用していたのである。秀頼と共に自害した「新参衆」の名簿しかり、おきくが浅井家に仕えた祖父と父の縁で淀殿に奉公したこと、淀殿の妹常高院のお供をし、その子若狭守から「強飯」をもらい、同じく京極家出身の龍子(松ノ丸殿。母は浅井氏)を頼つたのは、祖父以来仕えてきた浅井家の縁者なら支えてくれると思つたからであ

ろう。

これらの女房衆とは異なる、大坂方の中心として戦場で活躍し戦死した真田幸村の妻は、五月二十日、「紀州いとの郡(伊都郡)忍居」たのを、和歌山城主浅野長晟に捕らえられ、徳川將軍家に差し出されている。このとき、幸村の妻は、秀頼から真田家に拝領した黄金五七枚と「来國俊」の脇差をもっていたという。浅野氏から徳川家に差し出されたこれらの品は、浅野長晟に賜っている。⁽¹⁶⁾

真田幸村の妻は大谷吉継(吉隆)の娘である。関ヶ原合戦で三成方として奮戦した吉継の息女であったことが、徳川家の処罰をより厳しくさせた可能性はあるが、この人が捕らえられたのは、武将の妻への縁坐の好例とみてよいのではなからうか。武将の妻が「女性であるから」といつて処罰を免れる時代は過ぎ去った。妻への縁坐は、秀吉時代のお市の柴田勝家と共に自害した事件以来、よりいっそう厳しく問われる時代になっていたのである。

もう一点は武将の子それも男子の夏の陣後についてである。大野治房は治長の弟で、「主戦派として豊臣軍を指揮した」人であり、『大坂夏の陣図屏風』にも描かれる、豊臣方の武将の中心人物である。治長のもう一人の弟治胤(道犬)は夏の陣のとき逃亡し、五月二十日に「大仏辺」で生け捕られている。おそらく京へ逃げていたのであろう。注目されるのは治房の子宗室(宗説)であり、慶安二年(一六四九)近江箕浦の誓願寺に匿われていたとして捕らえられている。夏の陣から三十四年後に捕らえられたのである。そして宗室は京都三条河原で斬首されている。この事件をきっかけに幕府の残党狩りは再び厳しくなり、

同年、百姓となっていた後藤又兵衛の長男左太郎が和泉淡輪で捕らえられている。そして治房の子の逮捕を機に、大野治房の妻などその「一類」の探索が本願寺末寺に対して広く通達され、本寺に対して報告が義務づけられた事実があることである。大坂方の武將の妻子や一類の探索は陣後三十四年を経て再び厳しくなされたことがわかる。このように大坂夏の陣の豊臣方の武將については陣後三十年を経ても妻子一族の探索が続けられ、特に武將の男子は、何年経っても縁座を免れることはできなかったのである⁽¹⁷⁾。

いっぽう、夏の陣直後の「残党狩」は特に厳しく、慶長二十年五月、薩摩まで落ち延びた豊臣方の兵士とその関係者は男女にかかわらず幼児であつても捕らえて京都に連行せよと幕府は命じており、六月には慶長十八年以後豊臣家に仕え、陣後落ち延びて郷里に帰った奉公人を捕らえ置くようにとの命も出されている⁽¹⁸⁾。

夏の陣直後は豊臣方に加わり籠城した人々の妻子や「預け物」まで探索するように命じていたから⁽¹⁹⁾、籠城衆は男女にかかわらず妻子に至るまで捕らえ、またその財産をも没収することを、幕府は基本方針としていたことがわかる。おきくの預け物も見えられれば没収されたであろう。

しかし中臈女房以下は命が助けられたので、男性に比べて縁坐は軽く済んだことはたしかである。しかし女房衆のトップ、それに大坂方の中心にいて女房衆を統括していた淀殿は、罪を免れないという風潮は存在したであろう。千姫を城外に渡し、敢然と秀頼と共に自害した淀殿は、まさに大坂方の中心にいて全責任を負う存在であつたのである

る。淀殿は母お市の方の自害に倣ったが、お市の方は娘三人を城外に逃れさせたのに対し、秀頼は男子であり、大坂城の中心にいたため、同じ場所ですることになった点で異なっている。そのかわり千姫を徳川方に帰したのは、七歳で豊臣家にやってきた千姫に対する淀殿の暖かい配慮によると思う。秀頼の子は、七歳の女子が十二日に早くも京極若狭守の手で捕らえられて差し出され、八歳の男子は二十一日に伏見で捕らえられ、二十三日に六条河原で処刑され、そのとき乳母は助命されたが、その夫「乳母男」田中六左衛門は誅されている⁽²⁰⁾。

このように夏の陣においては、縁坐は信長時代よりもより厳しく問われ、主君や武將の妻子、女房の上司はもちろん、それは男性の一般家臣にまで及んでいたことがわかる。武將の妻や子に対しては、特に厳しく追及されたことは、真田幸村の妻や大野治房の子の例に明らかである。

最後に付言しておきたい点は、夏の陣直後に多くの落人が逃げた場所が京都であつたことである。おきくも京都をめざして無事辿り着いている。幕府が落人を連行せよと命じた場所も京都であつた。なぜ京都が大坂城について大坂方の拠点と目されていたのか、その理由を考えてみると、まず第一に秀吉没後京にはおねが「京の城」に、次いで高台寺にいて、大坂城の淀殿や秀頼と連絡をとりあつてしたこと、おねは「北政所」時代以後後家になつてからも、京の朝廷や公家・寺社と緊密に接触を続け、豊国社での祭礼の主賓として臨んでいたことがあげられる⁽²¹⁾。第二には、関ヶ原合戦後、西軍に味方して敗戦を経験した武士たちが、かなりの数京都に潜伏して好機を待っていたため

あると思う。例えば長宗我部盛親は関ヶ原後京都で子供たちに手習いを教えていたと言われており、仙石宗也(秀範)も京都で手習いの師匠をしていたという。⁽²²⁾ 彼ら浪人は、おね(北政所・高台院)が京で豊臣家を支えていることに力づけられ、また有形・無形のかたちでおねと連絡を取り、またおねに支えられていたのではないかと思う。おねの山内一豊の妻との交流の史料などからみて、おねが京都で秀吉の菩提を弔う仕事に専念した背後には、おねの朝廷・公家・寺社への接触と情報収集だけでなく、豊臣恩顧の大名家との接触や関ヶ原浪人との接触と保護が存在するように思われてならない。

注

- (1) 伊勢氏関係の系図には「伊勢系図」「勢州系図」「伊勢系図別本」の三編がある。いずれも『統群書類従 第六輯上(統群書類従完成会、一九二八年、改正三版は一九七九年刊行)』所収。なお伊勢氏略系図や、於菊についての考察は、拙稿「中世の家と教育―伊勢氏、蜷川氏の家、家職と教育―」参照(『日本中世の社会と女性』所収、吉川弘文館、一九九八年)。
- (2) 「比丘尼御所」とあるので、順花院は「曇華院」ではないかと思う。曇華院はしかし慶長八年(一六〇三)に焼亡してしまいが、のち再建されることになる。
- (3) 拙著『女人政治の中世』講談社現代新書、一九九六年。
- (4) 『当代記 駿府記』統群書類従完成会、一九九五年。
- (5) 『おきく物語』(『日本庶民生活史料集成』第八巻所収、三一書房、一九九九年)。
- (6) おきくの祖父山口茂助は浅井家で一二〇〇石取り、父茂左衛門は藤堂家の浪人客分として三〇〇石取りであったと、おきくが述べていることから、中級家臣クラスと見てよいと思われる。
- (7) 衣服や道具を入れる箱で、棒を通してこれを従者に運ばせた。

- (8) 帷子とは単衣の着物の総称で、材質は絹や麻であることが多かった。
- (9) 「大坂陣山口休庵咄」「土屋忠兵衛知貞私記」(いずれも『統々群書類従 第四史伝部』所収、統群書類従完成会、一九七八年)。
- (10) 前掲「大坂陣山口休庵咄」。
- (11) 前掲『当代記 駿府記』。
- (12) 行器とは、食物を入れて持ち運ぶ道具のことで、「外居」の字が当てられたように、外出したときの食べ物を入れるための弁当入れのこと。
- (13) 桑田忠親校注『改訂信長公記』新人物往来社、一九六五年。
- (14) 前掲「大坂陣山口休庵咄」。
- (15) 『おあん物語』注⑤書所収。
- (16) 前掲『当代記 駿府記』。
- (17) 前掲『当代記 駿府記』、『浪人たちの大坂の陣』(大阪城天守閣、二〇一四年)。
- (18) 「山口直友書状」及び「安藤重信・土肥利勝・酒井忠世連署奉書写」(前掲『浪人たちの大坂の陣』所収)。
- (19) 「甲斐庄正房書状」(前掲『浪人たちの大坂の陣』所収)。
- (20) 前掲『当代記 駿府記』。
- (21) 拙著「北政所おね 大坂の事は、ことの葉もなし」ミネルヴァ書房、二〇〇七年。
- (22) 前掲「大坂陣山口休庵咄」。
- (23) 「千代(見性院)書状」(拙著『山内一豊と千代』岩波書店、二〇〇五)は、慶長一年以後の四月のものであると推定されるが、おねからの依頼で「うす色の山茶花」を土佐山内家から取り寄せてほしいと、当主山内忠義に依頼した書状である。書状から読み取れる点は、おねが豊臣恩顧の大名の妻と関ヶ原以後も交流を持ち続けていることである。さらに山茶花の取り寄せを千代は「こうきの事」と表現している(拙稿「北政所おね」点は重要である。つまりおねの仕事である人的交流は「公儀」の仕事であると述べているのである。豊臣家は当時(慶長一年ごろ)、江戸幕府と並ぶ公儀であるとの認識が大名たちや武士階級、浪人衆に至るまで広がっていたのではないかと推測する。